

〔協力者〕資料提供、寄稿など〕「敬称略、旧姓、○内の数字は期」

〔教職員〕笈川省三 在原千寿子（現佐藤） 草深清 飯盛宏 橋本司郎
金子シサ 鹿倉操 寺島利雄 地引滋子 千葉紀胤 高木正子（現千葉）
田村三雄 富樫格（現小倉） 渡辺有晃 鈴木昌男 飯島三千夫 村上正治
外畑幸一 齊藤純 高井伸明 田島淑子 加藤恵

〔PTA〕熊野美恵子 菊永正子

〔卒業生〕① 田中芳雄 竹本郁子 渡辺一善 橋本和明 米本尚之助 岡
崎香苗 石橋洋子 野口伊代 高松良江 渡辺清 ② 豊高明子 景山哲郎
高木恒久 ③ 山崎健司 豊川章 田中久子 中川久美子 中田幸子 小出
トモ子 陶山安三 小林新平 江畑芳也 坪田美佐子 青柳久美子 湯浅
久子 坂本敦子 山岡秀子 千田順子 山崎愛子 庄司由利子 ④ 佐橋陽
二 森順子 戸泉きぬ子 ⑤ 本吉健也 中川康彦 繁田佳彦 三村武教
河野康男 鉾崎さだ子 橋本扶美江 ⑦ 平島寛子 大野弥寿子 ⑧ 平林
正子 岡田道子 福田昭 松村恒夫 ⑩ 柴山慶太 加藤重夫 小出武夫
丸山孝平 ⑬ 本間真喜子 ⑭ 田中啓三郎 山崎恭子 栗山葉子
市立市川考古博物館 市立市川歴史博物館 市川市教育委員会文化課

〔編集・執筆〕

山田齊 岸田弘 細谷広澄 川崎睦子 橋本佳代子 山田尚美

〔参考文献〕「（ ）内は著者、訳者、編者、出版社」

「下総東葛飾郡国分村須和田弥生式遺蹟研究摘要」〔『武蔵野』第一八巻
四六号〕杉原莊介 「須和田遺蹟に於ける二綴文式貝塚」〔一九三八 考古
学九一五〕杉原莊介 「市川市須和田奈良時代遺蹟」〔一九五五 古代第一
四、一五合併号〕滝口宏 『京成電鉄五十五年史』〔一九六七 京成電鉄株
式会社〕「首藤保之助考古学資料採集記録」〔一九八四 須賀川市立博物館

「市川二中五十年史」編集・名簿整備委員会

〔敬称略、○内の数字は期〕

編集委員長 山田 齊
名簿整備委員長 桑村益夫

校長 中山廣璋（前校長 秋元茂樹、元校長 飯島三千夫）

教頭 外畑幸一

PTA会長 田中啓之（前会長 篠塚政美、元会長 米倉一博）

副会長 小林俊之 小泉久子 杉浦洋子（前副会長 熊野美恵子

石川佳子）

卒業生

① 岸田弘 細谷広澄 渡辺一善 川崎睦子（現天野） 森岡常郎 石橋
洋子（現豊田） 本名京子（現井科） ② 水野ふく子（現溝口） 豊高明子
（現御酒本） 鹿野宗治 中野和江（現阿部） ③ 豊川章 橋本佳代子（現
石原） 庄司由利子（現山下） 星野喜久子 山崎健司 石井貫太 松村茂
寺田昌弘 大塚喜美代（現渡辺） ④ 森順子（現石川） 佐橋陽二 ⑤ 山
田尚美 橋本扶美江（現鈴木） 三村武教 ⑥ 森川忠正 杉原保子（現本多）
⑦ 大野弥寿子（現新井） 平島寛子（現藤井） ⑧ 福田昭 平林正子（現
柿本） 岡田道子（現富田） ⑨ 鶴岡宗雄 ⑩ 小出武夫 加藤重夫 林伸
幸 柴山慶太 ⑫ 鶴沢緑（現河村） 米沢元嗣 ⑬ 服部純子（現佐野）
本間真喜子（現中村） ⑭ 小林俊之 ⑮ 金子正美 ⑯ 山崎登久子（現志
田） 松本伊佐夫 ⑰ 深川保典 田中啓之 ⑱ 渡辺成子（現秋葉） ⑲ 田
中啓三郎 山崎恭子（現菅田） 栗山葉子（現山口） ⑳ 浅岡裕 ㉑ 柴崎
孝夫 石本恵理 齋藤雅代（現安藤） ㉒ 篠田久夫 田手浩司 ㉓ 帆刈隆
一 都筑靖 ㉔ 清水基継 ㉕ 安芸澄子 杉浦健仁 ㉖ 安田英則 ㉗ 小
島一秀 ㉘ 内盛渉 河野一郎 馬原洋海 ㉙ 下村恭 山田典子（現石田）

調査報告書第四集）「博士館 墨書土器私考」〔一九八四 史館第一七号）
佐々木和博 「下総国府台」〔一九九七 和洋学園 寺村光晴ほか 『学制百
二十年史』〔文部省）『朝日新聞社史昭和戦後編』『占領と民主主義』（神
田文）『教育の森』（村松喬）『占領下の教育改革と検閲』（高橋史朗／
ハリーレイ）『戦後日本の原点』（袖井林二郎／竹前栄治）『毎日グラフ別
冊』サン写真新聞「戦後につぼん」『一億人の昭和史』（毎日新聞）『昭
和戦後史教育のあゆみ』（読売新聞社）『実録昭和史・激動の軌跡3』（ぎょ
うせい）『戦後大事典』（三省堂）『地図に刻まれた歴史と景観』（新入
物往来社）『増補新日本教育史』（共同出版）『教科書で見る近代日本の教
育』（東京書籍）『戦後日本教育史』（岩波書店）『教科書墨書』（労働旬報
社）『日本人の履歴書』（唐沢富太郎）『教育読本・教科書』（河出書房新
社）『改定中学校学習指導要領の展開 国語科編』（明治書院）『近代日本
総合年表』（岩波書店）『中等国語一下～三下』（三省堂）『中学校国語一
上～三下』（学校図書）『郭沫若詩集』（須田禎一）『教育長ものがたり』
（山口重直）『偏差値信仰』（唐木専爾／大塚隆）『戦後教育五十年』（野原
明）

『市川市民読本』『市川の文学』『市川市の教育』（市川市教育委員会）
『市川市史』『市川市年表』

『真間小学校五十年史』（真間小学校五十年史編集委員会）

市川市立第二中学校「学校沿革史」「学校経営要覧」「学校要覧」「玉藻」

「二中学校内新聞」「二中新聞」「特殊学級経営録」「二中PTA会報」「すわだ」

「二中同窓会会報」「各期卒業アルバム」

⑬ 雨宮慶 長崎克彦 川野博彦 ⑮ 石谷幸嗣 中里功 井内由紀子（現
佐藤） ⑯ 小池恭久 ⑰ 佐藤知子 熊田康之 ⑱ 岡野谷太郎 神島大輔
小池恵二郎 ⑲ 林秀明 ⑳ 椎津喜則 佐伯文字 ㉑ 徳住真木 相田祐里
江

市川市立第二中学校 五十年事業

校長 中山廣璋 実行委員長 田中啓之

創立五十年記念式典・祝賀会

平成九年十一月十五日 於 二中体育館

『市川二中五十年史』発行

記念品 下敷き 記念小冊子

同窓会の再発足

この度刊行される「市川二中五十年史」を多くの方々に読んで頂くために卒業生名簿が必要になり、名簿の整備作業を進めるうちに、長い間休眠状態にあった同窓会を復活させようとの機運が盛り上がりました。平成九年十一月一日に「市川二中同窓会臨時総会」を開催し、三十数年ぶりに同窓会を再発足させるはこびになりました。この機会をお借りして、同窓会設立当初の状況をご紹介しますと共に、今後の同窓会のあり方について私の考えを申し述べたいと存じます。

昭和二十六年に、一期生の有志が中心となって鹿倉先生の熱心な指導の下に同窓会設立の準備にあたり、同年八月に真間小学校の講堂で第一回の同窓会総会を開きました。当時高校二年生であった我々は社会的経験に乏しく、同窓会の組織作りや会則の起案等、又財政面でも手探りで進めざるを得ず、誠に不完全な態勢での発足となりました。

総会は第一回以降、第八回（三十三年）位まで毎年開催され、先生や卒業生による演劇、音楽等のアトラクションを盛り込み、有意義な交流の場となりました。総会の他にも、学校との進学・就職懇談会や映画会等の文化活動を定期的に開催し、三十年には「同窓会会報」を創刊しました。三十三年に待望の講堂（旧木造建築）が建設された際には、同窓会としても寄付金を募りました。三十年代後半になって設立初期の役員が次々と社会人となって行くにつれて、同窓会活動は次第に停滞して残念ながらいっしょに中断のやむなきに至ってしまいました。当事者の一人として責任を痛感しております。同窓会を通しての世代を超えた交流があれば、先輩や後輩の社会的経験が、同窓生の将来に良い示唆を与えるに違いありません。さらに、先生や学校も、卒業生のその後を見守って下さることが出来ると思います。

同窓会活動への関心は年齢層によって大きな差があり、総じて高年齢層の関心度が高く、関心の低い若年層とのギャップをいかにして縮めて行けるかが課題です。その為には、須和田祭等の学校や地域社会との行事に、より多くの同窓生が参加したり、クラブ活動を通じて在校生と同窓生が交流する等、母校を介して、世代を超えた接触を深める地道な努力が必要です。私事になって恐縮ですが、私の出身高校では、音楽部の卒業生が、六十歳代から在校生に至る迄世代を超えて、同窓会活動の一環として「淡交フィルハーモニー管弦楽団」を組織して定期的な演奏活動を行い交流を深めています。我々一期生は、山田齊君が中心となって、オリンピック開催の年に、恩師をお招きして同期会を開催して居り、昨秋は、六名の恩師と七十五名の同期生が一堂に会して旧交を温めました。

市川二中の一万五千名を超える卒業生の中には、地域、実業、学術、スポーツ、芸術等の分野で活躍されている方も少なくなく、このような方々との交流は、在校生や同窓生にとって有意義なことでしょう。これらの交流の推進母体となる同窓会の存在意義は、大方の認める所でありましょうが、その活動の維持、推進には多大な努力が必要です。特に財政の面では、多くの問題をかかえております。当面は、ここ数年取り組んできた名簿の整備、「市川二中五十年史」の配付、総会の開催、文化、スポーツ活動等を通じての母校との交流の強化、会報の発行等を目標として、新役員各位のご協力の下に、「市川二中同窓会」を運営して参りたいと考えております。同窓生各位の絶大なご協力、ご援助並びに学校、PTAの方々のご支援を切にお願い申し上げます。

編集後記

市川二中の歴史を残しておきたいという気持ちは前から持っていた。

開校当時の先達^{せんたう}が他界されるにつけ^{ひしめ}一入その感を深くした。

気がついてみると、母校には纏まった記録がなく、かねてより歴代の校長も記念誌の上梓を念願されていたが、創立四十周年を機に有志の間で五十年史編纂の機運が盛り上がった。卒業生としては喜ぶべき事である。

しかし、この事業を実行する組織も財源も無く、やむなく当面の手掛かりとして一期生を中心とした卒業生に呼び掛け、その後全校的態勢を整えることにした。

平成二年四月、第一回の委員会を開き、『五十年間に亘る歴史を忠実に後世に伝える』という基本方針を掲げて、開校当時のPTAの役員（八十歳前後）にお集まり頂き座談会を開催した。

その後、年代区分を十年単位に分け、資料蒐集を始めることにした。

当初は大分先の事なので年に二、三回資料を持ちより、少しずつ蒐集を続けることとしたが、全校的な参加が不可欠と判断、平成五年当時の飯島校長と五十周年について懇談を持ち、記念誌はどちらの学校でも必ず作るとの前提の下に、全卒業生（各期代表）に協力呼びかけた。

PTAも五十周年記念事業積立金を予算化、全校態勢が整うこととなった。

何回もの会合を重ね平成七年、編集・名簿の担当者を決め各々具体的な行動に移った。

平成八年、五十年史発行の財源として賛助金の募集を開始。旧教職員・卒業生・父母の多大な賛助を得る。平行して平成九年にかけ、編集・名簿共に数十回の会合を持ち目標に邁進する。

特に今年の九月は暑い中、週二回のペースで十月末発刊を目指す。資金面ではどうなる事かと気が

採んだが、どうにかそれも乗り越えた。

新制中学は全てが零から始まった学校制度のため、創草期の記述に多くが割かれ、現在に近づくにつれて、記述が減少するきらいがある。これは、資料の多寡によるばかりではなく、歴史が未だ熟していないことに起因しているように思われる。

原稿、写真等の多くの貴重な資料等、提供下さった方々並びに現旧教職員、PTA、卒業生を問わず多くの関係者に絶大なる協力を賜った事は望外の幸せであった。こうした仕事は、ボランティアの気概のみならず、特殊な能力も要求される。当初お集り頂いた多くの卒業生に対し、適切な役割をお願ひ出来なかったのは、委員長としての力量不足と心から反省している。最後まで辛抱強く編集を担った天野、石原氏のお二人は遠路、手弁当で二年にわたり精勤してください、岸田、細谷両氏は勤務の合い間に重責を果たされた。また、会計を担当して下さった井料氏には大変な手数を煩わせた。さらにこの二年、出版社との煩瑣な連絡をはじめ、当計画の全般にわたって細心の配慮で、進行に当たってくれたのが山田（尚）氏であった。これら諸氏の労苦に万感の想いを込めて御礼申し上げたい。限られた時間と制約された資料のため書き足りない点等は、不慣れた委員に免じて御容赦戴きたい。各章の内容に多少の片寄りがあることは、蒐集した資料の制約と思料されて、宜しくご寛恕戴くと共に次代の諸兄弟の補綴に期待することにする。

上梓に漕ぎつけ、当初の悩みは杞憂に終わり、今又望蜀の念に駆られている。

㈱一穂社 代表取締役 古谷先男氏の骨身を惜しまぬ御指導御鞭撻に深甚なる謝意を表す次第である。

平成九年十月吉日

『市川二中五十年史』編集委員会 委員長 山田 齊

市川二中五十年史

編集・発行——市川二中五十年史編集委員会

〒272 千葉県市川市須和田2-34-1

Tel 0473(71)6188

発行日——一九九七年十一月十日

制作協力——(株)一穂社

Tel 03(3866)6221

印刷・平文社 製本・三和製本所